12 月 31 日のメッセージ

聖書：マタイによる福音書　2：　1－12

「どこにおれらますか」

子どもの頃、12 月 25 日の朝が来るのが本当に楽しみでした。「今年はどんなプレゼントだろう」と包装紙を剥がす喜びは、今もって他に代えがたいものがあります。

ところが、年が明けて 1 月 8 日を迎えると、あれほど光り輝いていたあの喜びが急速にしぼむのを感じました。単に時間が経過したという理由もあります。しかし、それ以上に大きかったのは、「A 君は○○をもらったらしい」、「B 君は△△だった」、「C さんは□□に連れて行ってもらった」という、他者との比較の中で自分へのプレゼントの価値が下がったように思えたのです。

相対化ということ自体は悪いことではありません。「あの時に比べれば今なんて」と現状を打破する大きな力を生むのが相対化の力です。それによって人間は様々な状況を乗り越えてきました。それは「自分の中で相対化しているから」できることです。ところが、現代社会はこの相対化を外野が行うところに問題があるのではないか、とジャーナリストのモーリー・ロバートソンは指摘します。

「今やジョン・レノンが反戦ソングを歌っても『相対化』され……てしまう。……例えばパレスチナを念頭に『人々の頭上に爆弾の雨を降らせるな』と歌ったとします。もちろん共感する人々も多い一方、『ユダヤ人を虐殺したテロは野放しか？』といったツッコミも殺到するでしょう。無制限に開放された SNS やニュース記事のコメント欄の影響で、社会が“純粋なメッセージを純粋に受け取る”ことは以前よりもはるかに難しくなっています。」(週プレニュース、2023 年 12 月 18 日)

本来は両立しうる二つの事柄が対立化され、しかも相対化されることによってその意義が薄められてしまいます。そして、それぞれが唯一無二の事柄であるはずの喜びでさえも相対化されてしまいます。例えば、「クリスマスを祝う暇があるなら社会に目を向けよ」と対立が煽られたこと、そして、その反動から「礼拝のみ」と叫ばれたことは、過去の遺物でしょうか。

しかし、神はそのような人間が自分たちで勝手に作り出した呪縛から解放するために、私たちに救い主を与えられたのではなかったのでしょうか(「神は、その御子を……律法の下に生まれた者としてお遣わしに……それは、律法の支配下にある者を贖い出して、……神の子となさるためでした。」ガラテヤの信徒への手紙 4:4-5)。

「生まれたばかりの幼子が救い主である」という、対立化し、相対化しうる状況を敢えて与えることによって、人間同士の対立には何の意味も無いことが明らかにされたのではなかったでしょうか(「狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。」イザヤ書 11:6)。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(マタイによる福音書 2:2)

占星術の学者たちは純粋に喜びを表すためにやってきました。命の危険をも顧みず、神の道の正しさを信じて、はるばる旅してきました(「主の道はことごとく正しく／御業は慈しみを示しています。」詩編 145:17)。そして、幼子に会い、喜びに満ちて帰っていきました(「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」マタイによる福音書 2:10)。

その後、彼らはどう生きたでしょう。これらの出来事について黙して過ごしたでしょうか。

私はそうは思いません。羊飼いたちが神を賛美しながら帰っていったように(「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」ルカによる福音書 2:20)、学者たちもその喜び、それぞれの現場で伝えたことでしょう。彼らと同じように救い主を捜し求める人々に、喜びを伝えたはずです。

私たちも同じ喜びを知っています。「救い主はどこにおられますか」と問われたときに、すぐに応え、動けるように備えながら、新しい一年へと向かって参りましょう。